

あの日の 決断

岩手の経営者たち

北

上市和賀町後藤の西部開発農産は2015年、ベトナム・

ハノイに「同社初の海外現地法人「西部農産ベトナム」を立ち上げた。

「規模拡大のため、海外展開できないか」。同社の前社長、照井耕一さん(74)が最初に可能性を探ったのは中国。8年前のことだった。

上海近郊の農地を紹介されたが、川は鉛が浮いているような汚れた。無理と分かりつつ、「口実」を兼ねて1年だけコメを栽培。日中関係の緊迫化も理由に撤退した。

国内で環太平洋連携協定(TPP)の論議が始まり、日本の農業はますます厳しくなると感じていた。取引先の話から、ターゲットをベトナムに変更。現地の事情を2年間見て歩き、世界有数のコメの輸出国にもかかわらず、機械化が遅れている現状を知った。「ベトナム農業の近代化」が、照井さんの新たなモチベーション



稲刈り前の田んぼで従業員と語らう照井耕一さん(右から2人目)。「病気からここまで回復するとは思わなかった。まだしばらくは農業をやりたい」と語る=北上市和賀町藤根

規模拡大目指し海外へ 農業への情熱衰えず

西部開発農産

▽⑤△

照井耕一さん

ンになった。

13年、現地で日本米の試験栽培を始めた。まずまず良いコメが取れたが、課題は多かった。「政府からコメを売るライセンスが出ず、農地も借地。社会主義国のため、外国企業が経営権を握る合弁会社の設立も難しかった」

課題は依然残るが、あきらめてはいない。期待は、所得増などから消費が伸びている牛肉の生産(肉牛肥育)。海外進出は社長時代に肝いりで始めた。「俺はまだ15年、20年は生きる。その間に何としても形になれば」。心は第一線のままだ。

近年は胃がん、白血病と大病が続いた。14年に発症した白血病では、妻の麗さん(59)ら家族が「余命1カ月」と宣告されるほど。1年間の入院を経て、「奇跡の奇跡」(照井さん)で病に打ち勝った。体重は20kg減った。

この間、長男の勝也さん(49)に社長を譲り、2年前には会長職も辞した。次男の涉さん(47)は常務として財務面を支えている。

勝也さんは「経営の考え方には違いがある」としながら、「農地を大事にしようという精神は尊敬している」と語る。農村も農政も大きく変わってきた時代にあって、耕作条件の良しあしに関係なく、頼まれれば作物を作ってきた父親の姿勢は理解している。

照井さんの信条は「体験や勉強は、若い時ほど身につく」。社員は平均年齢は30代前半と若く、創業以来、児童生徒や学生の体験・実習活動にも、積極的に対応してきた。泊まりがけで研修生が来れば、今も自宅と一緒に食事を取る。

伝えるのは「人は食べないと生きられない。食料を作る農業は一番素晴らしい仕事」という確信。時代はどんなに変わっても、農業人としての誇りがあせることはない。

(照井耕一さんの回は終わり。次回は12月に掲載予定)